

山椒は小粒でも…

Vol.25

どうやって、誰が決めるの？



30代、鳥羽へ帰ってきてまちづくりにかかり始めた頃、「まちづくりは、強力なオピニオンリーダー（世論先導者）が引っぱっていくものだ」という理論が主流でした。ほどなくして数年後、視察先でワークショップなるものに出会いました。「えっ！世の中にはこんな会議の方法があるのか」と目からウロコでした。

では問題解決しない」との意識が広がり、住民主体の勉強会が始まりました。この勉強会が行政との対話や共有を目指す中で行ったのが、まち歩きやまち点検。そしてそれらの活動を通じてプログラム化されていったのが、まちづくりワークショップです。

ワークショップ、直訳すると作業場。問題解決のための体験型会議といった意味あいでしょうか。当時似たような店名の作業屋さんがあり、市内にあったので、そのお店と間違えるといった笑い話もありました。

公園づくりや、道づくり、公共施設の整備の際に活用されますが、防災や防犯のタウンウォッチング、災害図上訓練（D-IG）などもワークショップのひとつですね。鳥羽での初見は鳥羽小学校の建て替え問題の時でしょうか。その後は妙慶川の改修工事や、市の総合計画づくりの際にも使っています。県内でももっとも早く導入をしましたから、当時は行政側も参加者のみなさんも、慣れない中

でのチャレンジでした。「もうワークショップはこりこりだ」といった声も聞かれましたが、これからの時代はこのプロセスは逃れられない、必ず越えていかなければならないハードルだと思いました。

市民体育館を中心とした中央公園の整備や水産研究所など、職員が知恵を絞るのはもちろん、みなさんと対話を重ねつつ、幸福を実感できるまちづくりに努力していきますので、ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。



ワークショップのひとつ
旗上げアンケート
口下手なかも5択の質問に旗を上げて意思表示。カンタン

模造紙、ポストイット(ふせん)、マジックは必須アイテム



Vol.183

市民課人権・市民交流係
☎ 1126

平和について考えよう 『先人からの警告』

新たな元号を迎えて3か月。わたしたちに課せられたものは何でしょうか。

日本国内では今なお、第二次世界大戦の爪痕として、工事現場や庭先などから不発弾が発見されること

があります。この不発弾は、空襲を受けた市街地や、地上戦が行われた沖縄、硫黄島などにとどまらず、大規模な空襲を受けなかった京都などからも発見されています。

一説によると、第二次世界大戦で使用された弾薬は、その後の撤去作業や永久不発弾を除外しても、約5%が不発弾として残されていると推定されています。

これらを重さに換算すると2600トンにもなるそうです。

発見された不発弾は、いつ爆発するか予測できず危険なため、自衛隊により年間2000件(80トン)ほどの処理が行われますが、完全な除去は難しいとされています。

このことは、「同じ過ちを繰り返さぬように」という先人たちからわたしたちへの強い「警告」のようにも感じられます。

高齢化が進み、総人口の8割弱(総務省統計)が戦後生まれといわれる中、忘れてはならない思いや風化させていけないできごとなどがあります。

わたしたちは、「平和ボケ」とも揶揄されるように、つい戦争のない今の生活を「当たり前」と捉えてしまいがちです。しかし、今ある平和は当たり前ではなく、今もなお残る不発弾などをきっかけの一つとして戦争の悲惨さがもたらす影響などを、自分たちの子どもや孫といった次世代に語り継いでいくことが必要です。